

ニホンジカ被害の『未然防止型対策』の検討と実践 第3報 ～ 低密度下におけるニホンジカの誘引及び捕獲試験 ～

関東森林管理局 計画保全部 計画課 計画調整官 齋藤 一広
(元 赤谷森林ふれあい推進センター)

公益財団法人日本自然保護協会 生物多様性保全部 主任 松井 宏宇^{ひろたか}

1 課題を取り上げた背景

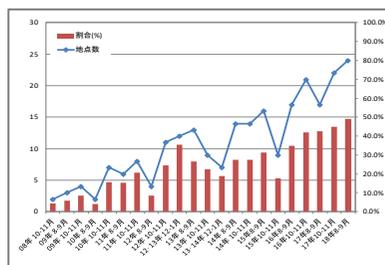
ニホンジカ（以下、シカ）の個体数の急激な増加及び分布域の拡大により、農林業だけではなく、生態系や生物多様性の保全上でも重大な脅威となっています。現在のシカ対策は、農林業や生態系への被害が出てからの取組となっていますが、被害を事前に防ぎ、長期的に効率的な管理を進めるためには、低密度下での管理が望ましいと考えられます。一方、低密度下での管理には、捕獲技術や捕獲の体制づくり（だれが、いつ、どのような資金で、どう捕るのか）など、これまでにない技術と体制が必要です。赤谷プロジェクト（関東森林管理局、地域協議会、日本自然保護協会）では、この技術・体制づくりの検討に取り組んでおり、今回は捕獲技術のまとめについて報告します。

2 取組の経過

(1) 赤谷の森におけるシカの動向と植生への影響調査

平成20年より赤谷の森の51地点にセンサーカメラを設置し調査を続けたところ、平成30年度までにシカを撮影した地点は最大で12倍、撮影頻度は最大で約15.5倍にまで増加しています（図1）。

一方、植生への影響調査では、赤谷の森のエリア全体の林床植生は比較的健全



(図1：シカの撮影地点の割合と地点数)

な状態であることを確認しています。

(2) 誘引試験（鈹塩及びヘイキューブによる誘引）

低密度下での捕獲にあたり、シカとの遭遇の可能性が低いことを考慮して、誘引（おびき寄せ）による捕獲が効果的と考え、試験地を設けて鈹塩とヘイキューブを設置し、センサーカメラによりモニタリングを続けたところ、鈹塩による誘引に効果があったことから捕獲試験を実施することとしました。

(3) シカ捕獲試験

捕獲の試みとして、平成30年10月29日～11月14日（うち13日間の実施）の期間に林内設置型囲い罠（以下、囲い罠）、箱罠、くくり罠による試験を実施しました。なお、囲い罠及び箱罠には、携帯電話回線を活用した通報装置を設置し、見回りコストを削減しました。また、効率的かつ錯誤捕獲を避けるため、くくり罠は、予め獣道から少し離れた位置に鈹塩を置いてシカを誘引した2箇所を設置し、捕獲箇所それぞれ3機、計6機の少数で試験を行いました。

3 実行結果

囲い罠及び箱罠は、罠の設置後からシカの出没が見られなくなり、捕獲に至りませんでした。くくり罠は、設置後も出現があり、10日目にオスジカの捕獲に成功しました。なお、捕獲後もシカの出現があり、一度捕獲した箇所でも再度捕獲できる可能性があることを確認しています。捕獲したシカは1頭のみですが、これは短期間、少ない罠数によるもので、調査努力量に対する捕獲効率が高い結果となっています。

4 考察

侵入初期段階（低密度）であっても、誘引餌材を用いたくくり罠では効率良く捕獲できる可能性を確認できました。一方、まだまだデータ数が少なく、引き続き捕獲方法について検討と実践の必要があると考えています。

なお、令和元年度は、10月～11月に設置箇所・期間を増やして捕獲を実施する予定です。